

(21) 以下の通り訂正いたします。

P223 共同発表者削除

誤

189) 統合実習後の学生が捉えた「看護課題」

○三ツ井圭子¹、真鍋知子¹、中澤明美¹、金屋佑子¹、
根本友見¹、羽毛田博美¹、塩田みどり¹、松沼瑠美子¹
¹了徳寺大学

【目的】

A看護系大学における看護の実践と統合実習を通して、学生が捉えた看護課題の内容を明らかにする。

【方法】

対象者：A大学看護学科の4年次に行われた統合実習に参加した学生97名中、研究協力を表明した73名とした。実習方法：看護の実践と統合実習（以下、統合実習）は、90時間（2単位）を、実習前半に実習施設の看護部長から看護管理についての講義を受け、2日間を看護師（メンバーとチームリーダー）のシャドウイングを行った。実習後半には、連続3日間複数（2名）受け持ち、チームに入って指導を受けながら複数患者の看護過程を展開した。データ収集方法および調査内容：統合実習の最終カンファレンス資料から、学生の看護課題と捉えられる文章を文脈からの意味を推考して一義一文で抽出した。分析：文脈を読み取りながら「看護課題」と思われる記述を抽出した。抽出したテキストデータは、文脈の意味内容を変えずに単純化し、類似した意味内容の要素を探し、それらを適確に表す表現に置き換え、抽象度を上げていきカテゴリー化した。用語の操作的定義：「看護課題」は、学生が看護学実習を通して、看護専門職として成長する自分自身の現在の問題や看護実践上必要であると自覚した内容と定義する。

【結果】

統合実習後に学生が捉えた「看護課題」は、166コード、25サブカテゴリーと【チームワークを発揮した看護の質を維持向上させる実践】(49)、【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】(39)、【時間を効率よく管理する能力】(25)、【看護展開のプロセスに基づく看護実践】(23)、【専門職の役割と責務を認識した看護師像】(11)、【病院内の看護管理の理解】(10)、【状況変化に対応する実践】(9)の7つのカテゴリーに分類された。括弧内はコード数を示す。

【考察】

学生は、チーム内での情報の流れやメンバー同士の協力を学び、チームが協働して活動し、看護の質を維持向上させる看護実践の重要性を認識していた。また、チームメンバーの主体的な参加が必要であると捉えていた。初めての複数患者の受け持ちであっても、領域別実習終了までに学んだ看護展開のプロセスが、個々の患者の看護実践のコアになると再認識していた。加えて、患者を尊重する姿勢をもって、複数患者の受け持ちを行うには、業務で看護が疎かにならないように考えていた。さらに、複数の患者に偏りなく公平に関わり、必要とされる看護を実施するには、効率的な時間管理能力が求められること、患者の健康段階が異なり多様なニーズが存在する臨床現場では、それに対応する実践力も求められていると捉えていた。学生は個人の能力を向上させる努力ができる人物に成長して看護実践をおこないたいと考えていることがわかった。今後、病院組織としての看護管理について学生が課題を達成したと実感できるよう統合実習の内容や方法を工夫する必要がある。

本研究は、了徳寺大学倫理審査委員会の承認（承認番号：2728）を得ている。

正

189) 統合実習後の学生が捉えた「看護課題」

○三ツ井圭子¹、真鍋知子¹、中澤明美¹、金屋佑子¹、
根本友見¹、羽毛田博美¹、塩田みどり¹
¹了徳寺大学

【目的】

A看護系大学における看護の実践と統合実習を通して、学生が捉えた看護課題の内容を明らかにする。

【方法】

対象者：A大学看護学科の4年次に行われた統合実習に参加した学生97名中、研究協力を表明した73名とした。実習方法：看護の実践と統合実習（以下、統合実習）は、90時間（2単位）を、実習前半に実習施設の看護部長から看護管理についての講義を受け、2日間を看護師（メンバーとチームリーダー）のシャドウイングを行った。実習後半には、連続3日間複数（2名）受け持ち、チームに入って指導を受けながら複数患者の看護過程を展開した。データ収集方法および調査内容：統合実習の最終カンファレンス資料から、学生の看護課題と捉えられる文章を文脈からの意味を推考して一義一文で抽出した。分析：文脈を読み取りながら「看護課題」と思われる記述を抽出した。抽出したテキストデータは、文脈の意味内容を変えずに単純化し、類似した意味内容の要素を探し、それらを適確に表す表現に置き換え、抽象度を上げていきカテゴリー化した。用語の操作的定義：「看護課題」は、学生が看護学実習を通して、看護専門職として成長する自分自身の現在の問題や看護実践上必要であると自覚した内容と定義する。

【結果】

統合実習後に学生が捉えた「看護課題」は、166コード、25サブカテゴリーと【チームワークを発揮した看護の質を維持向上させる実践】(49)、【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】(39)、【時間を効率よく管理する能力】(25)、【看護展開のプロセスに基づく看護実践】(23)、【専門職の役割と責務を認識した看護師像】(11)、【病院内の看護管理の理解】(10)、【状況変化に対応する実践】(9)の7つのカテゴリーに分類された。括弧内はコード数を示す。

【考察】

学生は、チーム内での情報の流れやメンバー同士の協力を学び、チームが協働して活動し、看護の質を維持向上させる看護実践の重要性を認識していた。また、チームメンバーの主体的な参加が必要であると捉えていた。初めての複数患者の受け持ちであっても、領域別実習終了までに学んだ看護展開のプロセスが、個々の患者の看護実践のコアになると再認識していた。加えて、患者を尊重する姿勢をもって、複数患者の受け持ちを行うには、業務で看護が疎かにならないように考えていた。さらに、複数の患者に偏りなく公平に関わり、必要とされる看護を実施するには、効率的な時間管理能力が求められること、患者の健康段階が異なり多様なニーズが存在する臨床現場では、それに対応する実践力も求められていると捉えていた。学生は個人の能力を向上させる努力ができる人物に成長して看護実践をおこないたいと考えていることがわかった。今後、病院組織としての看護管理について学生が課題を達成したと実感できるよう統合実習の内容や方法を工夫する必要がある。

本研究は、了徳寺大学倫理審査委員会の承認（承認番号：2728）を得ている。